教育講演

回復期リハビリテーション病院における化粧療法の実践



小笠原　彩華　蒲田リハビリテーション病院 言語聴覚士

回復期リハビリテーション病院は、脳血管疾患や運動器疾患などにより生活するための機能が低下した患者が、急性期の治療を終えた後、リハビリテーションを行う場所である。リハビリは、理学療法士（PT）は起き上がりや立ち上がりなどの基本動作や歩行、作業療法士（OT）は更衣や整容などの日常生活動作、上肢機能や認知機能、言語聴覚士（ST）はコミュニケーション、高次脳機能、嚥下などを中心にリハビリテーションを行い、多職種で患者の生活を支えている。

回復期に入院する患者は、それまで当たり前にできていたことが突然できなくなり、これまでの生活や役割を失ったことで、「自分の人生が急に変わってしまった」という戸惑いや不安を抱える時期でもある。そのため、身体機能の回復だけでなく、退院後に趣味や外出、人との交流など、その人それぞれが大切にしてきた生活を再獲得することを目指している。

近年、回復期のリハビリで化粧療法が注目されており、当院でも化粧療法を実施している。これまでの研究では、化粧療法により、認知症高齢者のBPSD（Behavior and Psychological Symptoms of Dementia）や幸福感、認知機能、意欲の改善が報告されている。高齢者を対象とした研究では、化粧療法による自己認識や生活機能、口腔機能・食事動作への影響についても報告されおり、化粧療法は心理面だけでなく、認知機能、意欲、社会交流、生活機能、口腔・摂食機能など、幅広い領域への有用性が期待されている。

当院でも化粧療法を実施し、表情の変化がなく、ほとんど声を発することがなかった患者が、化粧品を前にすると「この色がいい」と自ら話し始めることがある。また、化粧を諦めていた患者が自助具を使用し化粧が出来るようになることにより、「人に会いたい」と思え社会交流が増えたなど化粧という活動を通してさまざまな変化が生まれている。

本講座では、回復期リハビリテーション病院の役割とPT・OT・STなどによるリハビリテーションについて紹介するとともに、当院で実践している化粧療法を具体的な事例を交えて紹介する。化粧がもつ「人をきれいにする力」だけではなく、「やってみたい」「自分らしい生活を取り戻したい」という気持ちを引き出し社会参加へつなげる可能性について、化粧療法がリハビリにもたらす効果について紹介をしたい。

略　歴

2009年　帝京平成大学　健康メディカル学部　言語聴覚学科　卒業
2009年　八千代リハビリテーション病院
2011年　蒲田リハビリテーション病院